

# ルネサンスの華エリザベス一世とホームレスの女性

―無名の女性たち―

石 井 美 樹 子

## 女王陛下とホームレスの女性

アリス・バルストンの名を耳にした人は、法制史のそれも特殊な分野の専門家でもないかぎりいなかろう。わたしもスーザン・アムツセンの論文「エリザベス一世とアリス・バルストン―近世イギリスにおける性、階級そして特出した女性」<sup>(1)</sup>に出あうまで知らなかった。一七世紀のイギリスの女性浮浪者に関する研究は皆無に近いので、この論文に多くを負いながら私見をまじえ、女王陛下と女性浮浪者の生涯を互いの合わせ鏡にしつつ、当時の女性たちが置かれていた渦や澱みを掬いあげたい。

アリス・バルストンは高貴な生まれの女性でもなければ、教養ある女性でもない。彼女は、一七世紀のイギリス社会の最底辺に生きたホームレスの女性である。なのに、今日まで彼女の名が伝えられているのは、アリスが犯罪をおかしたからである。四度も裁判にかけられ、ドーセット市の裁判調書（一六二〇年から一六二四年）にその経過が記録されている。浮浪者にしては珍しいことに、死亡した年（一六二九年）さえわかっている。

一六世紀後半から一七世紀初期にかけて、イギリスはめざましい経済発展をとげ、国威は高揚した。経済発展は常に、大都市への人口の流入をうながし、物価の高騰、家族崩壊など深刻な社会問題を引き起こす。アリスは、繁栄する社会からおちこぼれた多くの名もなき貧民の一人である。社会の最底辺に生き、辛酸をなめ、極貧のうちに亡くなった。

エリザベス女王とアリス・バルストン。権勢の頂点を極めた女王と社会の最底辺で生きた女性、最高権力者と浮浪者、対照的な二人には共通する点がある。ともに、父権社会、男性優先社会の制約を受けた。ともに夫を持たず、特殊な身分ゆえに普通の女性とは違った生き方を強いられた。ほとんどの女性が無名の民として歴史の闇に埋没したが、二人の生涯は文字によって記録され今に伝えられている。エリザベス女王は、特権階級の女性たちの実像に迫る重要な鍵を握っている。いつぼつ、裁判調書に記されたアリスは、社会の底辺に位置した当時の女性の真の姿を伝えている。双方をあわせて透けて見えてくるのは、当時の女性の置かれた現実である。

## 結婚しない女王

イギリス初の女王君主は、メアリー一世（在位一五五二―一五五八年）である。その後、イギリスには、五人の女性君主が誕生した。エリザベス一世（在位一五五八―一六〇三年）、オレンジ公ウィリアムと共同統治したメアリー二世（在位一六八九―一六九四年）、アン女王（在位一七〇二―一七一四年）、ヴィクトリア女王（在位一八三七―一九〇一年）、現女王のエリザベス二世。ちなみに、国王は三十五名である。

一五五八年、エリザベスが登位したとき、姉のメアリー一世のときと同様に、国民は女王を例外的な女性とみなして受け入れた。女王は弱い女の身ながら、政治体としては、国王である。つまり、両性具の君主であるエリザベスの特異な存在とすることで、女王を戴くという異例の事態を乗り越えようとしたのである。

一五五八年一月にエリザベスを君主に推挙した枢密院議員たちは、女王はいずれ結婚するであろうと信じて疑わなかった。女王は二五歳という結婚適齢期にある。当時は、九〇パーセントの女性が結婚した。修道院制度が廃止され、独身女性を受け入れる施設が姿を消したので、結婚率がいつきに上昇した。女王はちかいうちに夫を持つであろう。女王を君主として仰ぎはするが、実権は女王の夫を中心とする側近たちが握る。その期待とともに、エリザベスの時代は幕を開けた。

イギリスの歴代の君主のなかで、結婚しなかったのは、ジョン王（在位一一九九—一二一六年）とエリザベス一世だけである。ジョン王には男色の傾向があり、結婚するそぶりさえ見せなかった。君主のもっとも重要な役目は後継者を残すことであるから、君主が生涯結婚しないことはありえない。結婚適齢期をとつに過ぎ、三七歳で即位したメアリー一世でさえ、高齢出産にともなう危険を恐れながらも、スペインのフェリペ（のちのフェリペ二世）と結婚した。結婚をお膳立てしたのは、フェリペの父、神聖ローマ帝国皇帝カール五世である。むろん、イギリスをハプスブルグ家の衛星国とし、宿敵フランスに対抗するためである。スペインとの縁組は、メアリーが望みうる最高の結婚であった。しかし、この政略結婚に反対する国民の声は強く、結婚を阻止しようと、反乱が一度となく起こった。だれもが、宗教がカトリックに舞い戻ったつえに、イギリスがスペインの属国になるのではないかと危惧した。メアリー女王の側近たちはこの結婚を承認したが、結婚式の前の議会で、フェリペを女王の夫として迎え

はするが、政治体としてのメアリーは「王（男性）」であると定め、フェリベの力を制限する法的措置をとった。

エリザベスには、王女時代に、幾度となく結婚話がもちあがった。メアリー女王時代には、フェリベに後押しされたサヴォイ公エマヌエル・フィリベルトと強制的に結婚させられそうになった。しかし、「いまは結婚する気持ちにはなれません」といつてきっぱり断った。

即位すると、女王に結婚を迫る周囲の圧力はいつそう強まる。

## 女性の君主を戴くこと

エリザベスが即位したとき、ヨーロッパは「女性の時代」をむかえていた。スコットランド女王メアリーの母メアリー・ド・ギーズはジェームズ五世と死別したあと、幼い女王、娘メアリー・スチュアートに代わって摂政としてスコットランドに君臨していた。メアリー・スチュアート（フランス皇太子フランソワと結婚）の嫁ぎ先のフランスでは、アンリ二世が馬上槍試合で致命傷を負い、落命すると、妃カトリーヌ・ド・メデイチが、つぎつぎに王位に就く息子たちの摂政として政権を牛耳ってゆく。ブルゴーニュでは、カール五世の妹ハンガリー王末亡人メアリーがカール五世の代理として君臨していた。その前の総督はカールの叔母マルガリーテであつた。

このような状況のなか、知識人や聖職者たちは、女性君主の是非をめぐって熱い議論をたたかわせた。<sup>(2)</sup> フランソワと死別したスコットランド女王メアリー・スチュアートが帰国すると、長老派教会の牧師ジョン・ノックスが女性君主に対する激しい説教を展開して、論陣をはった。メアリーはノックスを宮殿に招き、彼の説教に耳を傾け、

折り合いをつけようと努力したが、ノックスは態度をやわらげようとはしなかった。エリザベスはノックスをふくめ女性君主を誹謗することはや動きにたいし断固とした態度で臨んだ。だが、女王に敵対する活発な情宣活動が止むことはなかった。一五七三年のこと、女王を誹謗する怪文書がロンドンに出回った。怪文書には、女王は国のシンボルにすぎず、実力を掌握しているのは側近たちであると記されていた。女王は激怒し、パンフレットの回収を命じるとともに、パンフレットを所持している者を厳しく罰した。

エリザベス女王は宰相ウィリアム・セシルをはじめとする経験豊かで賢明な側近たちに囲まれていた。彼らを選んだのは女王であつた。当初、側近たちは女王が女性にふさわしく振る舞い、「賢明な」男性たちの意見に従つてちがいないと期待していた。しかし、女王はあやつり人形になることを拒み、彼らの思いどおりにはならなかった。女王の背後でひそかに実力を行使しようとした者には、人前で口汚くののしり、はげしく叱責した。姉メアリーとは違って、エリザベスは名だけの君主ではなかった。父ヘンリー八世のように、絶対君主として権力を行使し、君臨することを欲した。

議会は数度にわたつて女王が結婚すべきであると決議し、女王に嘆願書を提出した。女王が結婚せず、子を残さずに他界したら、王位をめぐつて国は混乱する。女王は彼らの憂慮を知っていたから、嘆願を無視したり、軽視したりはしなかった。嘆願書が出されるたびに、自分にふさわしい男性があらわれればいつでも結婚すると誠実に答えた。

結局、女王は結婚しなかった。肉体上のあるいは精神上の問題があつたわけでも、よい結婚相手がいなかったわけでもない。女王はかなり早い時期に独身を貫くことを決心していたようだ。結婚すれば、王権を夫と分かちも

ことになる。そうすれば、女王の権力は半減する。これが、女王が独身を貫いた主な理由であろう。それに、姉メアリーとスコットランド女王メアリーがともに、女性君主が結婚することの愚かしさを夙に教えてくれていた。

## 実権を行使した女王

結婚や後継者問題はかりでなく、外交・国政の重要課題については、エリザベスは主体性をもって実権を行使した。外国との戦争、貴族の処刑、とくにスコットランド女王メアリーの処刑など、重大な決断をしなければならなるときは、女王は熟考し、決断し、その決断を翻し、また決断し、振り子のように揺れ動いた。女王に翻弄された側近は、決断力がないのは、女だからだと陰口をたたいた。誰がどう思おうとも、女王は慎重を常とした。

女王が王におとらず一國を立派に統治できるという事実は、当時の人びとにとっては驚嘆以外のなにものでもなかったであろう。エリザベス女王の存在そのものが、人びとの女性観を根本から問いなおすことをせまった。だが、人びとはエリザベスを例外とみなすことで、その問題に直面することを避けた。女王自身も、女性の地位向上のために努力した形跡はない。

いつの時代でも、国王の情事は大目に見られた。国王が情事で庶子をもつけたとなると、称賛されても非難されはしなかった。王に貞節を期待する者はおらず、愛人を持たない王はいなかった。古い話になるが、碩学王として名をなしたヘンリー一世（在位一〇〇一—一三五年）には、公認の庶子が二〇人もいた。女王君主の場合は、そうはいかない。愛情面で、ほとんど自由を持たない。エリザベスには、龍臣レスター伯爵ロバート・ダドリーと秘

密の結婚をしたとか、伯爵とのあいだに幾人もの子をもつけたといった噂が絶えなかった。根拠のないスキャンダルは、人の名誉を傷つけるいちばんつとり早い方法である。噂は女王の威厳を傷つけた。女王とても、女性に貞節を強制する社会規範の制約を受けたのである。

しかし、女王は噂という「迫害者」に屈せず、レスター伯爵を身边にはべらしつづけた。六回結婚し、ウルジー、トマス・モア、トマス・クロムウェルといった右腕の側近をご都合主義で処刑台におくったヘンリー八世とは異なり、女王は友人を大切にし、信頼した。宰相ウィリアム・セシルとの二人三脚は彼が亡くなるまで半世紀近くもつづいた。

一五八八年、スペインの無敵艦隊との決戦の直前、女王は白いヒロードの衣装に身をつつみ、鎧・兜で身をかため、白馬に乗り、エセックスのテムズ川河口のテイルベリーの野営地に集合した兵士たちのまえに姿を見せ、「わたくしは、繊細で弱い女の肉体を持つ者ですが、わたくしのこころと精神は、王のよつに勇敢で、恐れを知りません。わが王国の境界線を踏みこじる者にたいしては、なんびとであるうとも、戦いを挑みます」と演説した。

テイルベリーでの演説からもわかるように、女王は、女王であると同時に王である。私的な場面では女性らしく振る舞ったが、公的な場では、女王は自分を「王」とみなし、臣下にたいしては常に「王」として接した。女王はいつも「王であるわたくしは」(we prince)と言った。実際、王の勇氣と決断力を持たなければ、権力欲の強い側近をまとめ、国を統治し、外国の君主と渡り合つてゆくことはできなかったであろう。

女王は結婚もせず、後継者を指名することも拒みつづけた。女王が生きているあいだに、次の君主が決まっていたら、不満分子は次期王に群がる。このことを、女王は身をもって知っていた。姉メアリーの時代に、野心家の貴

族たちがいかにエリザベスを利用しようとしたか。そのためにエリザベスはロンドン塔に投獄され、生命を失いかけた。一八年ものあいだためらったすえに、エリザベスはスコットランド女王メアリーを処刑した。イギリスの王位継承権を持つメアリー（メアリーはヘンリー八世の姉マーガレットの孫）が生きているかぎり反乱の策謀が絶えず、エリザベスは枕を高くして眠れなかったのである。

エリザベス女王が男性的な側面を発揮して貴族たちの自生力を抑え、国を支配したことは、生涯のライバルであったスコットランド女王メアリー・スチュアートと対照的である。メアリーは背が高く容姿の美しい女性で、男のこころを魅惑する不思議な力を持っていた。メアリーに会った男性はことごとく、彼女の魅力の虜になった。メアリーに魅せられたイギリス貴族が幾度となく、イギリスに幽閉されているメアリーの脱出に力を貸そうと反乱を企てた。そのために命を落とした者も少なからずいる。エリザベスは、自分を「王であるわたくしは」といったが、女の魅力を利用して男たちを操作するメアリーを、いつも、女王（*princess*）と呼んだ。イギリスの筆頭貴族第四代ノーフォーク公爵トマス・ホワードは、イギリスの王位継承権を持つメアリーと結婚して玉座に登るといふ陰謀にかつぎあげられ、陰謀が発覚して、一五七二年に処刑された。メアリーの女の魅力は彼女の力ともなり、いのち取りともなった。メアリーがスコットランド女王の座を追われたのは、夫ダーンリー伯爵ヘンリーの暗殺者ボズウェルと結婚して民意を失ったためである。

## 終焉をむかえる「女性の時代」

エリザベス（女王）は、当時の高貴な身分の女性が受けうる最高の教育を受けた。エリザベスが、貴族たちが女子教育に熱をあげているときに育ったのは幸運といわなければならない。独身を守ったことのほかに、女王の治世の成功のもう一つの鍵は高い教養である。ラテン語とフランス語とスペイン語とイタリア語を自由にあやつり、ギリシア語に秀で、楽器の演奏も上手、舞踏会では優雅に軽やかにステップを踏んだ。

十六世紀のイギリスは、女性の人文学者を輩出した。ラテン語からの英訳版『われらが主に関する論考』（*Devout Treatise upon the Paternoster*）を出版したトマス・モアの娘マーガレット・ローパー、キャサリン・オブ・アラゴン王妃の薫陶を受けたメアリー女王、プラトンをギリシア語で読んだ「九日間の女王様」とシエーン・グレイ、『罪人の嘆き』（*The Lamentation or Complaints of a Sinner*, 1547）や『聖書の詩編と祈り』（*Psalms or Prayers out of Holy Scripture*, 1544）などを著作・出版したヘンリー八世の六番目の妃キャサリン・パー、七か国語に秀で、兄フィリップ・シドニーの作品を完成させて出版し、みずからも『詩編』や『アントニーの悲劇』などの翻訳に取り組んだペンブルク伯爵夫人メアリー・シドニー・ハーバート、日記作者アン・クリフォード、同じく日記作者マーガレット・ディキンズ、恋愛詩や牧歌劇にも手を染めたレディ・ロス、古典学者として名高いミルドレッド・クックとエリザベス・クック姉妹……。

女王は自分が受けた最高の教育を治世に存分に生かした。教養あふれる女王を賛美することは、エリザベス時代の文学にあふれている。エリザベスの退場とともに、「女性の時代」は終焉をむかえた。ブルジョワ階級の台頭・富の蓄積とともに父権制が強まり、プロテスタント化が進んだためである。かつては神父が担っていた宗教教育をふくめ、父親が家族の教育に深くかかわるようになり、父権制の強化に拍車をかけた。

エリザベス時代の文人ジョン・フェントンはエリザベス女王をこういつて賛美した。

「女王は すべての女性の誇りである。世界の驚嘆である。世人は女王を賛美してやまない。」

興味深いことに、ジョン・フェントンは ジェームズ一世をむかえたとき、こういつて新しい御世を寿いでいる。

「われらはもはや何も恐れることはない。王を戴くことになったのだから。エリザベス女王の時代には、いまほど幸せではなかった。なぜなら、女王が病気になるれたり、お亡くなりになったら、国はどのなるかわからず、国民は不安にかられていたからである。」<sup>(3)</sup>

女王を戴いたイギリスは異常事態にあったといわんばかりである。ジェームズ王をむかえてようやく、通常の状態に戻ったと、だれもが感じたのであろうか。

女王の葬儀で弔辞を述べた聖職者の一人はチチエスター主教だった。宰相ウィリアム・セシルに長年仕えたジョン・クラパムは、チチエスター主教の弔辞をこう伝えている。

「チチエスター主教は確信にみちた声でこう言った。女王が玉座におられたあいだ、いかに多くの神の御祝福がイギリスにみちたことか。女王は信仰の守護者であられ、平和をもたらす者であられ、苦しむ者の救い主であられた。女王は力のかぎりこの世を疾走され、いまや、永遠の幸福というゴールを手にされた。女王をどれほど賛美しても賛美しきれない。だが、女王の偉業を引き継ぎ、いや増すために、思いもかけず神様がわれわれのために選ばれた新しい王を賛美しようではないか。」<sup>(4)</sup>

弔辞のなかで女王は賛美されている。しかし、希望は新しい王にむけられている。女性君主の時代がようやく去り、王が到来したことに安堵しているかのようだ。

## アリス・バルストンの犯罪

さて、ここで、話をアリス・バルストンにむけよう。

一七世紀初頭のイギリスに、アリス・バルストンのような浮浪者はどれほどいたのだろうか。戸籍も国勢調査もなく、失業者数も定かでない時代だったから、正確な数字をつかむのはむずかしい。それに、地域差もある。浮浪を理由に逮捕された人の数は、ホワイトホール（政府）に報告がなされた年に限ってみると、一五六七年から七二年にかけて、年間平均、一千五百人、一六三一年から三九年にかけては、四千四百七十七人。<sup>(5)</sup> 女性の浮浪者は、二〇から三〇パーセントだったという。女性浮浪者はだいたい三つのタイプに分けられた。自分を捨てた夫やパートナーを探すうちに住所不定の貧困者になる場合、娼婦、そして未婚の妊婦と母。

アリス・バルストンがドーセットの裁判官の前にはじめて姿を見せたのは、雇い主から二五シリングを盗んだと訴えられたときである（シリングの単位は一九七一年に廃止になった）。一シリングは二ペンス。二五シリングは三百ペンス、三ポンドである。当時の職人の日当は六ペンスぐらいといわれている。三百ペンスは職人の五〇日分の給料に相当する。盗みが露見したとき、アリスは、雇い主から盗んだ二五シリングのうち二〇シリングを返したが、五シリングを「食料やそのほかの生活必需品」に使ってしまった。

この盗みから数か月後、アリス・バルストンは二人の靴職人を訴えた。ウッドベリー・ヒルの市（フェア）でアリスは彼らと性交渉を持ち、その礼に靴職人たちがアリスに金を支払ったと主張したのである。この種の売春は

法律で禁じられたいた。いつぱう、靴職人たちは自分たちが寝ているあいだにアリスに金を盗まれたと訴えた。

それから数か月後、アリスが妊娠していることが判明した。裁判で、アリスは前言をひるがえして、胎の子の父は前の雇い主の男ではなく、「ロング・ロビン」という名の男であるといった。子どもと父親は前の雇い主だと言いつづけていたのは、監獄で知り合った女性たちに入れ知恵されたためだったといふ。<sup>(6)</sup>

それから数年を経て、一六三年のクリスマス・イブと元旦を、アリスはある酒場で過ごした。酒場に、盗賊の一味が居合わせていた。アリスは彼らの会話を小耳にはさんだ。耳にした盗賊たちの会話を裁判所に通報し、それが記録された。

アリスは一六二九年六月前後に亡くなり、トマス・ゲング (Thomas Geng) なる男が、アリスの子どもの養育費を支払うように裁判所から命じられている。一六三三年以後に、アリスは二度目の妊娠をしたようだ。

アリス・バルストンの犯罪は、窃盗と不法な性行為である。最初の盗みで、雇い主の家を追いつて出されて投獄された。出獄したあと、まともな生活にもどることができなくなり、犯罪を重ねた。職も住む場所も失ったアリスは、ウッドベリー・ヒルのフェアでふたりの靴職人と知り合い、一時生活を共にした。アリスの訴えによれば、男たちはアリスに性交渉を強要した。いつぱう、男たちは、アリスが彼らの金を盗んだと訴えた。この事件で、アリスは二度目の監獄行きとなった。

刑期を終えて監獄を出たアリスはすぐに酒場に行った。そして、いつしよに刑期を終えた仲間と祝杯をあげ、そのついでに一人の男と性交渉を持った。その結果、妊娠した。当時、婚外妊娠は犯罪であった。仕事も家もなくおまけに胎に子どもをかかえ、命をつなぐためには盗みをはたらくほかなかった。アリスは、子どもが生まれるま

での十か月のあいだに、盗みを繰り返している。

アリスは他家で奉公しながらもな生活をおくっていた。ところが、最初の罪みを犯してからは、墮落の道をころげ落ちてゆく。底辺に生きる女性が犯罪者の烙印を一旦捺されたら、名誉を回復することはむずかしく、社会復帰はほとんど不可能だ。<sup>(7)</sup> 頼りになる親類縁者も知り合いもなく、住む家も食物を買った金も無い女性が落ちてゆく先は、売春か物乞いか窃盗である。

アリスのような女性たちの姿は、犯罪者として裁判にかけられたときの記録などからしかわからない。もっと運がよい女性たちは、文盲であつても、筆記者を雇い、遺書や財産目録などを作り、生きた軌跡を残すことができた。特権階級の女性たちは文字を所有していたから、手紙や日記や覚え書きや家計簿や、創作などをとおして生きた証を残した。

われわれが日常経験しているように、問題が起きても、裁判沙汰にならずに済む場合のほうがずっと多い。アリスは犯罪を犯し、裁判にかけられたので、生きた証拠を残している。しかし、問題も起こさず平凡に一生を終えた普通の女性たちは時の闇のなかに葬り去られ、痕跡を残すことはない。

## アリス・バルストン事件が伝えること

アリス・バルストンの裁判記録からは、女性が名誉と生活基盤を失うのがいかにたやすいかわかる。最初の盗みが、彼女のその後の人生を決定した。社会からはじきだされ、名誉を回復することも、職を見つけることもできな

かった。たつた一つの罪のために、靴職人との事件では、確たる証拠もなく犯人にされた。罪を一つでも犯せば、別の事件の罪までなすりつけられてしまう。弱者に苛酷な社会のメカニズムである。

女性が犯した罪の大半は窃盗と婚外妊娠と幼児殺しである。女性は婚外妊娠で罰せられるが、男性の場合、証拠を見つけるのが困難なために、おおかたが罰をのがれた。男性にたいする告発は、性的な問題もあるが、多くは社会的な問題、あるいは土地・財産・仕事などにかかる経済的な問題である。ほかに、酒を飲みすぎる、家族を虐待する、給料を運んでこないなどなど、問題は広範囲に及んでいる。

女性の場合は、結婚しているかどうか、家族がいるかどうか、いかなる家系の出であるか、金持ちであるかどうか、読み書きできるかどうか、その女性の価値を判断する基準となる。アリスのような、金も家族も地位もない女性に社会規範を一度破ったら、社会復帰はむずかしく、更生への道はほど遠い。

エリザベス女王もアリス・バルストンも等しく、男性優先の父権性社会のなかで生きた。かたや女王、もつっぽうはホームレスの浮浪者。身分には天と地の差があったが、二人とも同じことを社会から期待された。それは、まともな結婚をして子を生み育て、従順で寡黙な妻として、慈しみ深い母として生きることである。だが、二人はその規範に従わなかった。女王の場合もアリスの場合もできなかったといったほうがよいかもしれない。

男性より富んだ女性もいたし、男性よりも能力があり教養ある女性も大勢いた。しかし、女性の場合、何よりも男性に従順で貞節であることが求められ、従順さと貞節によって、女性の価値が値踏みされた。

イギリス国教会のプロテスタント化が進むにつれ、カルヴァン主義を奉じるピューリタンの女性観が力を強めていった。ピューリタンは女性の貞節と従順をことさら重んじた。女性の従順が問題になったときは、男性がい

に横暴で理不尽であつても、女性に勝ち目はない。男に逆らう女というレッテルを貼られただけで、社会のつまはじきになる。このような社会のなかで、エリザベスにとつてもアリスにとつても、女性らしく振る舞い、貞節であることはなによりも大事な財産であつた。女王が男性の領域をおおつぱらに侵したり、貞節を疑われたりしたら、名誉が傷つけられ、権力がそがれる。社会規範から外れる行為を理由に、力が制限され、反乱の誘惑が頭をもたげるだろう。処女王としてあがめられることを女王が望んだのは、社会がそう要請したからである。

アリスの人生は、父権性社会からドロップアウトした女性がいかに悲惨な運命をたどるかを物語っている。だれひとりとしてアリスの更生を期待してはいない。裁判にかけられても、アリスを弁護する人はなく、犯罪者のまま一生を終えた。無力な女性の現実、アリスを守る男性の不在、まともな身分の欠如、婚外妊娠……。アリスは社会からはじきだされ、人間としての尊厳すら守ることができなかった。

最高権力者のエリザベス女王はどうであらう。エリザベス女王は「弱い女の身ながら」と、女性であることを卑下することはしばしば口にし、神経質なほどに、自分の貞節を主張した。内に燃える情熱も恋も縊り殺して、処女王としての印象を国民に強く印象づけようと、あらゆる策を講じた。国王の場合とちがい、女王は国民の信頼を得るために、真実はどうであれ、「貞節」であらねばならなかったのだ。

女性結婚すれば夫の支配下に置かれ、裁判を起こす権利はむろんのこと、持参金や実家から相続した財産を管理する権利も失つ。女王とて、この制限から自由ではなかった。女王が夫をもてば、王権は半減される。独身を貫けば、権力を独占できる。そのためには、大きな犠牲を払わなければならない。独身にたいする偏見、重責をひとりで担つての苛酷さ、後継者の欠如とそれに伴つた社会不安、孤独との闘い……。

女王は結婚をあきらめた。しかし、最後まで女らしさを装い、王の心で武装した。女王が本当に処女のまま天國にみまかったのか。事実がどうであれ、処女王と賛美され、葬られた。いつぱう、アリスは未婚の母となって身をもちくずし、社会の最底辺に沈んでいった。女王と女浮浪者は、男社会の圧力を受け、その制約のなかで生き、異なる軌跡を描きながらも、合わせ鏡のように当時の女性たちが置かれた現実をつつしだしている。

エバの未裔として、すべての女性は平等だった。エバの未裔として、すべての女性は男性よりも罪に陥りやすい（といわれていた）。ということでは、女性はみな平等であった。つまり、女性はすべて、女王であっても、アリス・バルストンであっても、中世以来の男性優先の社会規範による差別を受けていたのである。キリスト教が女性たちをこの頸木から解放しようと努力した痕跡はない。女王が、女性君主という特殊な立場を利用して、女性の地位の向上に努めた形跡はない。そんなことをしたら、男性の反発をかい、反乱をつながしかねなかったからである。

エリザベス女王とアリス・バルストンは、普通の女性の範疇には入らない極端な例であろう。しかし、当時のすべての女性が同ような運命を背負い、同じような足枷をかけられていた。

## 信仰をとおして自立する女性たち―信仰に殉じたアン・アスキュー

弔辞は故人の一生をしめくくる。人びとは追悼のことに耳を傾けながら、いま一度、故人の歩いた道をふりかえり、その人柄をしのび、霊のやすらかなることを祈る。イギリス国教会でも、葬儀では、牧師や説教者が故人を

しのびながら、聴衆に説教をする。一七世紀の初頭に、葬儀の説教がいくつかまとめて出版された。<sup>(8)</sup> そのなかには、故人となった女性をしのぶ説教もある。説教からは、彼女たちのありし日の姿が浮かびあがってくる。当時の規範に照らしてよい妻であり、よい主婦であり、よい母であったかどうか。とくに、故人の信仰生活が重視されている。故人は生前、よき信仰生活をおくったか否か。よき信仰が家族や周囲の者たちに、よい影響をあたえたか。

説教者たちは例外なく、妻たちにむかって、主に仕えるように夫に仕え従いなさいと説いた。それでもなお、夫とは違う信仰を選び、みずからの道を歩む女性たちがいた。

女性は男性に従属しなければならない。しかし、女性に課せられた従属性は、信仰生活をとおしてのみ乗り越えることができる。ただ信仰によつてのみ、女性は性差別から解放され、神にちかづくことができる。信仰をとおして自立を果たした女性は少なくない。

女性たちが宗教に生きがいを見いだした本当の原因を探りあてるのは難しいが、女性たちが信仰に深くかわるようになる主な原因は二つあると考えられる。一つは、女性は本来的に男性よりも感情的であり、見えないものに献身する傾向が男性よりも強いこと。もう一つは、家事と育児にあけくれる単調な日常生活のなかで、精神的な充実感を望むようになり、それを宗教に求めること。とくに、性格の強い個性的な女性は宗教に生きがいを見いだす傾向がある。家事や育児は男性の仕事ほど価値を認められていない。家事にあけくれる日常生活からしばし逃避し、生活の外に生きる目的を見つけ、だれにも咎められずに、内面を発露できる場所は、この時代、宗教以外になかった。宗教に献身することにより、夫や父の束縛から逃れて自分自身に立ち返ることができる。

女性は「弱く愚か」だとみなされてきたが、キリスト教は強い意志をもつ女性を意図的に取りこみ、神の御業の証明のために用いてきた。聖書のなかにも、信仰に生きる女性は数多く登場する。現実世界でも、たとえば、一四世紀の神秘主義思想家で『キリストの降誕に関する黙示』を著したスウェーデンの聖女ビルジッタや、彼女に深く帰依し、キリストの幻視につき動かされて聖地にまで巡礼し、イギリス初の自伝を遺した商人の妻マージェリー・オブ・ケンブのような、感受性が強く篤い宗教心を持った女性たちが、世俗の人びとや宗教界に大きな精神的影響をあたえた。ルターに端を発するプロテスタントは、信仰において男女に差はないと主張し、進歩的な考えの女性を取りこむことに成功した。

イギリスでは、一五三四年に、ヘンリー八世がローマと決別して国教会が設立され、プロテスタント国家の仲間入りをした。とはいえ、霊界の首長がローマ教皇からイギリス王に替わったにすぎず、ヘンリー八世時代のイギリス国教会はローマカトリックの伝統をひきずっていた。当時の国教会主義者は、従来のカトリックの伝統を守ろうとする保守主義者と、カトリックの伝統を一掃し、ただ聖書によつてのみ神に近づくことをめざす進歩的的原理主義者の二派に分かれていた。進歩的な原理主義者は、カトリックの伝統のなかでも、聖餐式、カトリックのミサ典礼、聖職者の貞節の厳守、聖日の行列、煉獄の存在、イコン、マリア像などの聖イメージを槍玉にあげ、迷信、あるいは時代遅れのしるものとして排除しようとした。とくに、聖別されたパンと葡萄酒をキリストの肉と血とであるとするとする秘跡を否定し、キリストのシンボルにすぎないとした。カトリックの信仰を棄てない人は国教会委棄者として迫害されたが、パンと葡萄酒をキリストの肉と血とであることを認めない過激な原理主義者も異端とみなされた。この時期に、異端者として処刑された者は六〇人とも七〇人ともいわれている。そのなかに、女性の殉教者が四、

五人まじっている。その一人はアン・アスキューである。

アンが、アリス・バルストンのように、異端審問にかけられ処刑されなかったら、彼女の名が歴史に残ることはなかったであろう。

一五四六年五月二十四日、ヘンリー八世の枢密院は、「トマス・キムと、その妻は、召喚状を受けとってから一〇日以内に出現するべし」としたためた召喚状を二人の従者にもたせて、トマス・キムのもとに遣わした。

この召喚状には、「トマス・キムと、その妻」と記されているので、アンの名もアンの実家の名も記されていない。結婚した女性には、夫の姓で呼ばれるのが慣習であった。

一五四六年六月十八日、三度目に召喚されたときは、アンの名は、枢密院の報告書に明記された。

リンカンシャーのトマス・キムは、アン・アスキューという名の女性と結婚しているが、妻とともに枢密院に召喚された。トマスの妻は、正当な理由がないのに、彼が夫であることを拒絶している。キムは、再召喚されるまで、帰宅を許された。キムの妻は宗教を論じ、自説を曲げず、考えは向こう見ずで、悪しき思想を持ち、いかに教え諭しても効果がなく、ニューゲイトに投獄され、法にしたがって審問を受けることになった。<sup>9)</sup>

アンはカルヴァンよりさらに過激な改革者ツヴィングリに心酔しており、聖餐式でのパンと葡萄酒をキリストの肉と血とであるとする秘跡を認めなかった。そのために、一五四五年三月一日に逮捕され、一週間拘禁されて異端審問を受けた。いったん釈放されたが、同年の六月二三日に再逮捕され、二人の逮捕者とともに、異端審問を受

けた。だが、このときも、彼女を有罪に追い込む証言者があらわれず、釈放された。

一五四六年六月、アンは三度目の異端審問を受け、原理主義的な信仰を理由に、有罪とされ、七月一六日に、同じ罪を被せられた三人の「異端者」とともに、スミスフィールド刑場で火あぶりにされた。一五歳の若さであった。アンは殉教は、保守主義者にも改革主義者にも同様の強い衝撃をあたらえた。

アンを糾弾した保守主義者たちのなかには、ロンドン司教エドモンド・ボナー、ウィンチェスター司教ステイヴン・ガーディナー、大法官トマス・リオゼズリ、第三代ノーフォーク公爵トマス・ホワード、枢密院議員リチャード・リッチ卿（トマス・モアを有罪に追いこんだ法律家）など、そうそうたる有力者が含まれている。彼らの思惑は、アン・アスキューの背後に見えかくれる高位貴族の改革派の女性たちの名をアンの中から吐かせ、彼女たちの夫たちを失脚させることにあった。アンのパトロンのとして、ハートフォード伯爵エドワード・シーモア（故ジェーン・シーモア王妃の兄）の妻アン、枢密院議員でヘンリー八世の側近アントニー・デニーの妻ジョアン、ライル子爵ジョン・ダドリーの妻ジェーンなどの名があがっていた。みな、改革主義者として名高いキャサリン・パー王妃と親しい夫人たちであった。キャサリン・パーは、『罪人の嘆き』（*The Lamentations of a Sinner*）『天国のことを瞑想するよつにするための祈り』（*The Prayers Striving the Mind unto Heavenly Meditations*）を上梓し出版するほど教養豊かな女性で、進歩的な思想の女性たちが王妃のまわりに集まった。王妃は聖書講読会を主催し、たがいに信仰を深めあつた。「女は神のことはを口にすべきではない」と信じる保守主義者たちにとって、キャサリン王妃はめざわりな存在であつたろう。彼らの最終的な狙いは、キャサリン王妃を玉座からひきずりおろすことにあつたのかもしれない。だが、アンは酷い拷問にもかかわらず、キャサリン王妃の名を口にすることはつ

いになかった。アンは、ハートフォード伯爵夫人と、デニー夫人からお金をもらい、王妃のいとこニコラス・スロウモートンの訪問を受けたことを認めた以外、王妃との関与は否定した。

アンはリンカンシャーの紳士（ジェントリー）階級のウィリアム・アスキュー卿を父として一五二二年に生まれた。一〇代の終わり頃に、だいたい年の離れたトマス・キム卿と結婚させられた。キムは姉マーガレットの婚約者だったが、姉が結婚式をまえに亡くなったので、姉に代わってアンがキムと結婚した。一昔まえなら、アンのような宗教的な傾向の強い女性は修道院に生きる場所を求めたが、修道院が取り壊されたので、結婚以外に生きる場所がなかった。アンは夫とのあいだに二人の子をもつけたが、家庭生活になじめず、夫とは不仲であった。宗教をめぐって教区牧師と言い争ったことを期に、アンは婚家を追い出された。アンはヘンリー八世が第一番目の王妃キャサリン・オブ・アラゴンを離別したときの理由（キャサリンはヘンリーと結婚する前、ヘンリーの兄アーサーの妻だった。『レビ記』（二〇・二三）はきょうだいの伴侶との結婚を禁じている）に倣い、キムが姉の婚約者だった事実（婚約は結婚と同様の重みをもつ）を理由に離婚を教会法廷に申し出たが、拒絶された。夫と別居してからは、キャサリン・パー王妃のように、実家の姓を名乗り、ロンドンに赴き、神のことは説き宗教活動を展開した。アンは三度逮捕され、三度異端審問を受けた。保守派の異端審問官たちはアンの新約聖書の知識の正確さに舌をまいた。たとえば、大法官リオゼズリが、アンに「女は神のことはを口にしたり語ったりしてはならないと、聖パウロは教えている」というと、アンは慎重にことばを選んで、大法官の解釈の間違いを指摘した。そのときのこと、異端審問の経過を克明に綴った「異端審問」(Examinations)のなかで、次ぎのように記されている。

わたしは、大法官にこう答えました。わたくしはあなたと同じくらい使徒パウロの教えの意味を知っておりま  
す。『コリント信徒への手紙一』の第四章のなかで、パウロは、婦人たちに教会では黙っていないさい、婦人た  
ちは教会で語ることはゆるされておりませんといっているのであって、神のことは口にしてはならないといっ  
ているではありません。それから、わたしは、大法官にたずねました。これまでに、説教壇にのぼって説教し  
た女性を見たことがありますかと。大法官は答えました。一人も見たことはない。それをきいて、わたしはい  
いました。哀れな女性たちのあさがしをしないでください、パウロの教えに背き法を破ったのなら別ですが。<sup>(10)</sup>

アンは、女性が語ることを禁じられているのは、教会のなかにおいてであって、日常生活全般にわたってでない、  
教会のなかで発言することこそ禁じられているが、女性が神のことは口にしてならないと、聖パウロはいい  
ないと、反論したのである。

アンは雄弁だったが、ときには沈黙によって、審問に対抗した。「聖餅を食べたはずみは、神のめぐみを受けた  
か否か」ときかれたときには、アンは何もいわず、ただ微笑した。答えるに足らない愚問であることを、微笑によ  
ってほめかしたのだ。またアンは、謎めいた、ほとんど判じ物のようなことは審問官たちを上手に煙にまいた。  
「祭壇のうえのサクラメント（パンと葡萄酒の聖体）は、まことのキリストの肉体であるか否か」という核心に迫  
る問いにたいしては、アンはこう答えた。「それなら、わたくしがおたずねいたしましょう。ステファノはなぜ石  
打ちの刑にあって死んだのでしょうか。」アンは答えを、『使徒言行録』の七章と一七章に求めた。神のことは宣  
べ伝えるステファノは、神は「天地の主ですから、手で造られた神殿などにはお住みにならない」（『使徒言行録』

一七・二四」と主張したために、殺された。アンは、神は人間の手で造られたもの、すなわち聖餅などに宿らないことを暗示し、カトリックの秘跡を間接的に否定したのである。<sup>(11)</sup> この時期になっても、国教会の極端なプロテスタント化を防ぐために一五三九年に発令された「五カ条」(*The Act of Six Articles*)は健在だった。この法律にもとづき、聖餐式の秘跡を認めない人は異端者と断罪されたのである。

審問官たちは、正確な聖書の知識を武器に反論するアンに手を焼き、憎しみを募らせた。死刑をいいわたしたあとも、アンを拷問にかけた。これはあきらかな違法行為であった。アンは骨が砕け、肉がはみでるほど酷い拷問を受けても、自分の信仰を棄てようとはしなかった。

一五四六年七月八日、アンを拷問にかけける五日前、枢密院は、聖書講読を禁じる触れを出した。

「今後、八月末日以降、男、女、年令、身分の差を問わず、ティンダルあるいはコヴァディル訳の新約聖書を読んではならず、受けとつても、所持しても、貰つても、所蔵していてもならない。」<sup>(12)</sup>

死を覚悟したアンは、異端審問での問答を書き綴り、世話係に持たせて牢外に持ち出させた。アンは「異端審問」は、オッソリー司教をつとめたことのある亡命中の劇作家ジョン・ベイルの手に渡る。プロテスタントに傾倒するベイルはアンは「異端審問」に深く感動した。そして、多くの人にアン・アスキューの殉教と彼女の「異端審問」を知らせたいと願い、彼女の生涯についての物語を書き添えて、エドワード六世の時代になってから(一五四七年に、続いて一五五〇年、一五八五年に再版され、多くの読者をつかんだ)出版した。ベイルは「アンは主イエス・キリストの貴重なる血によって聖人に列せられた」と記している。<sup>(13)</sup>

「異端審問」は、異端狩りのお先棒をかついだスティーヴン・ガーディナー司教の教区でも読まれ、ガーディナ

司教は摂政エドワード・シーモアに宛てた一五四七年五月二日付けの手紙のなかで、「非常に有害で、扇動的中傷的な文書が出回っている」と報告している。ガーディナーは同じ年の六月六日にも、摂政に手紙を書き、アンの文書がたやすく手に入ることにについて苦情を述べている。<sup>(14)</sup>

メアリー女王が玉座につきふたびカトリックの世になると、アン・アスキューの死に勇気づけられて、多くの市井の女性がプロテスタントのために殉教した。

国教のプロテスタントからカトリックに回宗したイギリス女性のことも語ろう。

少し時代はくだるが、レディ・フォークランドこと、エリザベス・ケアリーも信仰を理由に夫と別居し（夫ヘンリー・ケアリーはのちに第一代フォークランド伯爵となる）、自分の信仰を貫いた。<sup>(15)</sup>

一六〇二年に、エリザベスはヘンリー・ケアリーと結婚し、一人の子どもをもつけた。子どもたちにフランス語、スペイン語、イタリア語、ラテン語、それにヘブライ語まで教えたという。エリザベスは一六〇〇年に、自作の叙情詩と牧歌詩を収めた『イングランドのヘリコン』(England's Helicon)を出版した。エリザベスは、「学問の愉しみ」(learning's delight)と呼ばれて敬愛を集めた。一六一三年に出版されたフランス風のセネカ劇、嫉妬に狂う夫ヘロデ王に殺されるマリウム王妃の悲劇を扱った『マリウムの悲劇』(Tragedy of Mariam)はイギリスにおける女性作家の手になるはじめての創作劇である。

一六二二年、エリザベスは夫の赴任地アイルランドから単身帰国すると、カトリックに回宗したのちに、「貞節の誓い」(夫妻の別居を許す中世時代からの慣習法)をし、夫と別居した。母につづいて六人の子どもがカトリックに回宗した。四人の娘はフランスのカンブレのベネディクト派のイギリス系修道会にはいり、二人の息子は修

道士となった。

エリザベスは夫と別居してから、無韻詩の『リチャード二世の歴史』(The History of Richard II)を出版している。

## キャサリン・ブレター信仰

葬儀の説教は、聖職者の女性観によって歪められることがあった。歪みはプロテスタントの聖職者よりもカトリックの聖職者に、よりはつきり見られるようだ。改革派(プロテスタント)に属する聖職者は、たとえその女性の生き方が社会規範や教会の教えから外れていたとしても、司牧者に耳を傾けたかどづかを重視する傾向がある。

キャサリン・ブレター(Katherine Brettergh)の葬儀のときの説教が、一六〇二年に出版された。<sup>16)</sup>貴族でない女性を悼む説教が印刷されたのは、イギリスでは、これが最初である。

キャサリンは次ぎの三つの点で普通の女性とは異なっている。

まず、キャサリンのために説教が二度なされている。ランカスター地方では有名な二人の説教者、ウィリアム・ハリソンとウィリアム・リーの二人がそれぞれキャサリンについて語り、彼女の生き方を賛美している。

第二に、一六〇二年にキャサリンを悼む説教が出版された際に、作者は不明であるが、キャサリンの生涯に関する記述が付された。

第三には、キャサリンのための説教が含まれている説教集は、一六四〇年までに、少なくとも六版を重ねた。六

版も重ねた説教集は類がない。どれほど多くの人に愛読されたかが分かる。付録のキャサリンの生涯は一六二二年と一六三四年に、単独で出版された。それを、サミュエル・クラークがイギリス人の宗教改革者に関する書を著す際に、自著のなかに含めた（一六五〇年）。<sup>(17)</sup>こうして、市井の二女性の生涯が後世に伝えられることになった。

キャサリンはチェシャーに生まれ、実家の名はブルーエン（Brienen）といった。両親を亡くし、だいたい年のはなれた、宗教心の篤い兄ジョンに育てられた。一五九九年にウィリアム・フレターと結婚してリヴァプールに移り、二年後に、風邪をこじらせて二歳の若さで亡くなった。

キャサリンと夫ウィリアムは緩やかなプロテスタント主義にあきたらず、ともに原理派のピューリタンになった。ウィリアムはリヴァプールの警察署長だった。ウィリアムが、国教会の信徒になるのを拒否しているカトリック信者を逮捕しようとしたことからチャイルドウォール教区で暴動が起こり、ウィリアムの家畜や馬が襲撃された。キャサリンが亡くなったとき、ウィリアム・ハリソンとウィリアム・リーはキャサリンを弔う説教をおして、説教台からカトリックを厳しく批判したのである。カトリック教徒たちは、キャサリンが死の床で悪魔の誘惑に屈したとの噂を流していたが、二人の説教者は噂を打ち消し、キャサリンが立派なキリスト教徒として天国に旅立ったと強調した。このときなされた説教にキャサリンの生涯が付されて、一六〇二年に出版されたのである。

キャサリンの生涯でもっとも興味深いのは、夫との関係である。キャサリンは、夫が召使に腹をたてているときには、怒りを鎮めるように夫を諭し、貧しい店子からは無理に家賃を取らないように助言した。夫の家畜や馬を襲撃したカトリック教徒にたいしては、「あなたを呪った人たちを祝福するように」と勧め、「懲らしめをあたえるのは神様にお任せしなさい」と語っている。キャサリンは夫をさりげなく優しく導く女性であったようだ。二人の説

教者はともに、ウィリアムが妻キャサリンの導きのおかげで、よりよい信仰生活をおくるようになったと述べている。篤い宗教心に支えられて、短い結婚生活ではあったが、キャサリンは夫とよい関係を築いたようだ。

## 中年女性の再婚

レディ・マーガレット・ハーバート・ダヴェナーズもまた、キャサリンのように、家庭で主導権を握っていたようだ。彼女も、篤い宗教心ゆえに歴史に名を残している。

マーガレットはシュロップシャーの特権階級の家生まれた。若くして、ウェールズ出身のリチャード・ハーバート・モンゴメリーと結婚した。夫は一五九六年に亡くなり、マーガレットは一〇人の子どもと残された。二人の息子、エドワード・ハーバートとジョージ・ハーバートは、のちに作家として名をなす。

夫が亡くなってから二年ほど経ったころ、マーガレットはサー・ジョン・ダヴェナーズと再婚した。マーガレットは四〇代であったが、夫の年令はその半分ぐらい、容姿の美しい男であった。ジョンの収入だけでは、大家族を支えきれなかったようで、結婚すると、ジョンはロンドン近郊チェルシーにある妻の家に移っている。

当時は、四〇代の女性の再婚率は、四〇代の男性の再婚率にくらべてずっと低かった。若い妻をめとる男性は多かったが、マーガレットとジョンのように、妻の年令が夫の年令の倍というケースはまれである。とくに、ロンドンのような、地方とくらべて男女の出会いの機会が多いところでは、若い男が年配の未亡人と結婚する例は少なかった。

そもそも、未亡人の再婚はつんざくさい目で見られた。一六世紀のスペインを代表する人文主義学者で、ヘンリー八世の娘メアリー王女の教育顧問を務め、キャサリン王妃の依頼で『キリスト教徒の女性教育』を上梓したホアン・ルドヴィゴス・ビバス（一四九二―一五四〇年）は、年配になってから夫を亡くした場合は再婚せず、祈りと神への献身の日々をおくるように勧めている。大いなる徳を備え円熟した未亡人は、若い女性の手本となるべきで、社会にやたらに姿を見せずに、ひっそりと暮らすように、すすめている。

教会は結婚を子孫を後世に残すために必要な制度と認め、結婚を祝福した。子を産む能力のない年配の女性が若い男を夫にすることは、夫が子を持つ可能性を阻むことになるから、悪しき行為と非難された。

マーガレットの再婚のような、年令や身分違いの結婚は、階層社会のおきてを破るものとして、非難された。ウィリアム・ゴージューは一六二三年に、「家庭における義務」(Of Domesticall Duties, London) という説教のなかで、「子どものような夫と結婚することは呪わしいことだ」と非難している。

若い男が、経済力があり、見識も常識も備えた年配の女性を相手に主導権を行使し、一家の主人としての地位を確立し守ることは、不可能ではないにしても、困難をとまなつたであろう。説教者たちはこそつて「妻が馬にのり、夫が徒歩で旅をすることは嘆かわしい」、「自然は夫の肉体を妻の上に置き、夫の顔を妻を支配するために造つた」と、説いている。

当時の社会規範からすれば、マーガレット・ハーバート・ダヴェナーズは肉欲にかられて若い男との結婚に走つたと揶揄されてもしかたがなかった。マーガレットが、教会と社会の非難に恐れをなした形跡はない。慣習や教会の教えに隷属することのない、自由な精神の持ち主であつたよつた。

未亡人は、男性と同等に法的に自立した女性とみなされ、家や財産を管理する権利をあたえられた。そのいつばうで、夫のない身であるがゆえに、社交の機会が限られ、交際範囲が限定された。

経済的に自立し常識も見識もある未亡人マーガレットが再婚し、夫の支配下に入る道を選んだ理由はなにか。マーガレットは再婚によって、社会的な身分をあげた。二番目の夫ダヴェナースはダンビー伯爵の弟にあたり、伯爵は皇太子チャールズの友人でもあった。それで、マーガレットは、身分の高い人たちと交際できるようになったのである。再婚してからほどなく、ダンビー伯爵邸でもよおされた劇作家ジョン・マーストン（一五七五頃―一六三四年）演出の余興に、マーガレットも招待されている。

セント・ポール大寺院の主任牧師であり、有名な詩人ジョン・ダン（一五七三―一六三二年）はすぐれた説教師だった。ときの国王チャールズ一世をまえにしばしば説教している。ジョン・ダンはマーガレットのために詩を書き、彼女に献上した。また、一六二五年にロンドンが疫病に見舞われたときには、ダンはチエルシーのマーガレットの屋敷に避難している。一六二七年、マーガレットが亡くなったとき、葬儀でジョン・ダンは故人を悼む説教をした。ジョン・ダンは、マーガレットの再婚は神の御心になうものだったと述べている。マーガレットとジョンは互いを補い支えあう関係にあったようだ。マーガレットは朗らかな女性で、家政のやりくりや財産の運営も上手だった。夫はしつかり者で、マーガレットより年長に見えたという。

説教者はこそつて、家庭における夫は、牧師のような存在で、妻をふくめて家族の信仰生活を正しく導く義務があると教えている。マーガレットと最初の夫がどのような信仰生活をおくったかはわからないが、ジョン・ダンの説教から推察するかぎり、二番目の結婚で信仰生活の主導権を握ったのは、妻マーガレットであった。マーガレッ

トは、家族が毎日の礼拝を欠かすことなく、また教会での礼拝にも規則正しく出席するように導き、それを身をもつて示した。

### 修道院へ入る夢をあきらめて

一六二二年、トマス・テイラーという名のピューリタンの説教者が、メアリー・グンターの葬儀で説教し、メアリーの生涯に言及した。メアリーの伝記の部分にはちに、サミエル・クラークの宗教改革者に関する彼の研究書に収められた。<sup>18)</sup>

メアリーは両親を亡くしたあと、一五九九年に、故レスター伯爵ロバート・ダドリー夫人レティス（一五四〇年生まれ）の被後見人となった。レティスはエリザベス女王の姪の娘（エリザベスの母アン・ブーリンの姉メアリーの子キャサリンの娘）にあたり、チューダー王朝一の美人と喧伝された。一五六〇年代に、二〇代で、エセックス伯爵ウォルター・デヴローと結婚し、五人の子どもをもつけた。五人のうち四人は幼児期を生きのび成人した。一五七八年に、エセックス伯爵が病没すると、レスター伯爵ロバート・ダドリーと秘密の結婚をし、女王の激怒をかった。ロバートが女王の愛人と噂されてから久しかった。ロバートは結婚する意志を見せぬ女王をあきらめ、レティスと再婚した。女王はレティスに宮廷への出入りを禁じ、あたかもロバートとレティスの結婚が存在しないかのように振る舞った。一五八四年、レティスとレスター伯爵のあいだに生まれた一人息子が死亡し、四年後にレスター伯爵も亡くなった。レティスはスタッフォードシャーの屋敷で隠遁生活をおくっていたが、一年後に四十九歳で、

クリストファー・ブロンントという名の若い男と三度目の結婚をした。クリストファーは生前のレスター伯爵に仕えた貴族で、レティスが最初の結婚でもうけた息子（エセックス伯爵ロバート）の親友であった。一五九九年に、ブロンント一族のメアリー・クレッスウェルがレティスの被後見人となった。メアリーは両親を亡くし、一四歳になるまで、あるカトリックの夫人のもとで育てられていた。

レティスは、メアリー・クレッスウェルを含めて、彼女に預けられている子女の教育、とくに宗教教育に心を配った。メアリー・クレッスウェルがカトリックに傾向し、大陸に亡命してカトリックの修道院に入る望みを抱いていることを知ると、レティスは、毎日曜日二回、メアリーを屋敷内の礼拝堂に連れてゆき礼拝にあずからせ、就寝まえには、ほかの女の召使たちと一緒に、その日の説教のおさらいさせた。一年後、レティスの努力が実ったのであるが、メアリーは修道院に入る夢をあきらめた。しかし、それからの数年間、メアリーの精神は不安定で、自殺をはかりさえした。回宗したことで、地獄に落ちるのではないかと怯えてた。この危機を乗りこえると、こんどは神は存在しないのではないかと、聖書の教えは嘘っぱちではないのかとの不信にさいなまれた。不信を克服したあとは、礼拝を規則正しく守るようになった。沈思黙想し、冒した罪を一つ一つあげて悔い、一年に六回は断食の苦行に身を委ねた。メアリーは自分を迷いと疑いから救い出し、揺るぎない信仰に導いてくれた伯爵夫人に深く感謝した。

一六〇一年、レティスの息子エセックス伯爵が反乱軍を組織し、エリザベス女王に退位をせまった。レスター伯爵亡きあと、エセックス伯爵が女王の最側近、寵臣として幅をきかせていた。エセックス伯爵の陰謀に、レティスの三番目の夫クリストファー・ブロンントも加担した。陰謀は事前に暴露され、二人とも処刑された。クリストフ

アー・ブローントは、自分がカトリック教徒であつたことを告白して断頭台にのぼつた。クリストファーの最後の告白を、レティスはどう受けとめたのであろうか。レティスは、息子のエセックス伯爵の死の直後、カトリック教徒から誹謗されたことがある。先代エセックス伯爵の存命中に、レスター伯爵と不義密通をおかし、夫を毒殺したと非難されのである。いいがかりにすぎなかったが、このような経験もあつて、レティスはカトリック嫌いになつたのかもしれない。それで、自分が養育しているメアリー・クレッスウェルがカトリックに傾倒していることを知ると、洗脳とも取れる厳しい宗教教育をほどこしたのであろう。

メアリー・クレッスウェルの少女時代の夢は、修道院で一生を過ごし、神に献身する日々をおくることであつた。この夢は伯爵夫人によつて破られた。しかし、幸せな結婚を手にした。メアリーは、レスター伯爵夫人レティスが用意した持参金を携えて、パークシャーの紳士階級に属するハンフリー・グンターと結婚した。二人は愛情ある夫婦関係を築いた。ハンフリーは、妻メアリーに先だたれたとき、妻の墓に「わが愛する聖女、わが心、わが心」と墓碑銘を刻んだ。

メアリー・クレッスウェルの場合が示しているように、プロテスタント国家となつたイギリスでは、カトリックを象徴する修道院にたいして強い反感があつた。修道院に相当する宗教上・教育上の機関がなかったため、子女の教育は家庭に任された。カトリック教徒のなかには、子女を、ルーヴァンのセント・ウルスラ修道院のような大陸に設立されたイギリス系のカトリックの修道院に送つて教育する者もいた。イギリス国教会が、教育機関としての女子修道院の設立を許可するのは、一九世紀になつてからである。

## 幼い王女様の死

エリザベスの死後、スコットランド王ジェームズ六世がジェームズ一世（在位一六〇三―一六二五年）としてイギリス王を兼ねることになった。ジェームズの娘、メアリー王女は二歳半という幼い身で天国に召された。一六〇七年のことである。幼児が亡くなった場合には、すみやかに埋葬され、大人は子どもがまるで存在しなかったかのようふるまった。幼児の死亡率があまりに高かったために、幼児期をすぎない子どもは、人格のある人間とみなされなかったのである。

普通の家庭では、子どもたちは七歳になるまで、母親または女性の家庭教師から養育された。子どもの宗教教育も彼女たちに任された。

ジェームズ王のメアリー王女は、王室の慣習にしたがい、両親から離れて育てられた。エスデリック男爵夫人エリザベス・クニヴェットがメアリー王女の養育にあたった。亡き王女を悼む説教はエリザベス・クニヴェットに捧げられており、これは、幼なくして亡くなった王家の子どもたちのためになされた説教で印刷された唯一のものである。メアリー王女の亡くなる直前の様子、エリザベス・クニヴェットの王女にたいする愛と献身、そして、幼い王女がどのような宗教教育を受けたかも記されている。

説教者ジェレミー・リーチによると、王女の病気が重くなると、十二時間近くも王女の唇からなんの音も聞こえてこなかった。だが、突然、王女は死が近いことを悟ったのか、かばそい声でこう言った。「わたしはまいります、わたちはまいります。」それから数分後、王女は自分を見守る人びとにいった。「神様のところにまいります。」最

後に、王女の幼いたましが天国にむかつて飛翔しているかのように、王女は小さな声で叫んだ。「わたしはまいります、わたしはまいります。」<sup>(19)</sup>

家族に宗教教育をほどこすのは、本来ならの夫や父親の役目であつた。家庭では、その役を女性になつことがあつた。説教者は、宗教教育に献身する女性を賛美することによつて、強い意志と篤い宗教心を持つ女性たちのエネルギーを家庭における宗教教育に向けさせようとした。レスター伯爵夫人レティスのように、カトリックへ傾向する女性をプロテスタントに回宗させたような場合にはとくに礼賛された。

ジェームズ一世の娘メアリー王女の例からは、子どもたちはかなり小さいときから、死に臨んでどう振る舞えばよいか教えられていたことがわかる。たつた二歳半のメアリー王女が死にけなげに立ちむかつたことは、王女が立派な宗教教育を受けていたことの証拠である。

従属する立場にある女性が、あるときにはその従属的な地位を利用して、あるときにはそれを越えて、家族を導いた。女性たちは、社会的には男性に従属する立場に置かれてはいたが、実際には、家庭と社会でさまざまな役割を果たした。女性たちは、説教壇の上から直接説教したり、法廷で裁判官のように人を裁いたりこそできなかったが、家庭では説教者や聖職者と同じ役割をになつていた。死者のための説教や墓碑銘は、そのような女性たちの姿を静かに物語っている。

# 注

- (1) アリス・バルストーンについては次の論文をとおして知り、本章はこの論文に基いて書いている。  
Susan Dwyer Amussen, "Elizabeth I and Alice Balstone: Gender, Class, and the Exceptional Woman in Early Modern England," in *Attending to Women in Early Modern England* (Newark: University of Delaware Press, 1998), pp. 219-240.
- (2) Paula Louise Scalingi, "The Scepter or the Distaff: The Question of Female Sovereignty 1516-1607," *The Historian* 41 (1978), 59-75.
- (3) Quoted by Amussen, op. cit., p. 223.
- (4) John Clapham, *Elizabeth of England: Certain Observations Concerning the Life and Reign of Queen Elizabeth*, ed. Evelyn Plummer, Read, Conyers (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1951), pp. 114-5.
- (5) A. L. Beier, *Masterless Men: The Vagrancy Problems in England, 1560-1640* (London: Methuen, 1985), pp. 15-16.
- (6) *The Case Book of Sir Francis Ashley, J. Recorder of Dorchester 1614-35*, ed. J. H. Betty, *Dorset Record Society* no. 7 (1981), pp. 62, 63-64, 66.
- (7) Susan Dwyer Amussen, *An Ordered Society: Gender and Class in Early Modern England* (Oxford: Basil Blackwell, 1988), pp. 98-101.
- (8) Thomas Moundeford, *A Sermon Preached at S. Martins Church in the Fields: At the funeral of the lady Blount* (London: B. Alsop, 1620), p. 32.
- (9) Acts of the Privy Council, 1542-47, p. 462, quoted in Theresa D. Kemp, "Translating (Anne) Askew: The Textual Remains of a Sixteenth-Century Heretic and Saint," *Renaissance Quarterly* 52 (1999), 1023-24.
- (10) *Ibid.*, 1040.

